

E-18 団地居住者の住要求と居住性について(第2報)

ノートルダム清心女大家政 榎並英子

目的 一般市民の住宅供給の場として重要な役目を果たしている公営団地住宅において、その限られた空間での生活は果たして住みよい機能的な生活の場になっているだろうか、今後の公営住宅のあり方の資料として、住み方の実態調査を行なった。

方法 調査は岡山県各地に散在する岡山県営団地の中から地域、環境、2DK、3DK、2階建の種類の中で間とり、部屋の広さの組合せなどの諸条件を考慮して次の3団地を選ぶ。アンケート用紙配布とききとりにより行なった。調査地；岡山県総社市総社団地、倉敷市中庄団地、岡山市西大寺益野団地

結果 第1報では家族構成と住み方の問題に関して間とりと部屋の転用性、設置家具の種類と数量などについて報告したが、今回は寝食分離、寝室分離の問題など就寝形態、部屋の転用性について限られた空間の中でより快適に過ごすためにどのような配慮がなされているかなどについて報告する。寝食分離ができていのかどうかは家族構成にも関係あるが間とりの影響が大きい。両親と子供、兄弟-姉妹における寝室分離は居住者の意識、子供の年齢によって異なるが、また住宅の型によって難易の差が現われ、これは副寝室の条件によってきまる反面、主寝室の条件がよければ結果としては分離を妨げやすい。部屋をいかに有効に使うか工夫しているのは30~40歳の年齢層の主婦に多く、この年代は家族数も増え、子供の就学年齢とも関係して、勉強のための空間を設けることを中心に住まいづくりへの努力がなされている。